

書式の原則

『音楽学』編集委員会では第47巻第1号（2001年度刊行）より、文献参照、注、引用文献一覧の表記の統一をはかることにいたしました〔2000年11月10日全国編集委員会決定、11月11日総会です承〕。学術論文の書式には、言語や分野によって様々な方式があり、どれが正しいかという絶対的な基準が存在するわけではありません。しかし、一つの学術雑誌のなかでは、なんらかの原則によって書式の統一をはかる必要があります。本誌では、音楽学の特殊性を考慮しながら、とりわけ参考文献の書式に関して、最小限度の統一をはかりました。執筆者は出来る限り下記の書式に従って投稿されることを希望します。欧文文献の表記方法については、基本的に、下記の手引き書が推奨する方式を基礎にしました。詳しい方法については下記をご参照下さい。

The Chicago manual of style. Fourteenth edition, Chicago: The University of Chicago Press, 1993.

また、第46巻第1号より、引用楽譜については、著作権表記を行っています。楽譜出版社によっては、学術論文であっても著作権使用料を請求する場合があります、その場合には、著作権使用料は論文執筆者の負担となりますのであらかじめご了承下さい。なお、著作権表示が必要な譜例か否か、それに伴う楽譜出版社とのあいだの必要な手続きは、原則として各自が行なうことになっております。ただし、ご本人が難しい場合にはその旨編集委員会にお申し出ください。

I. 投稿論文の基本構成

日本語による投稿論文の基本的な構成は、以下のようになります。*印で挟んだ部分は、必要がなければ省略可能です。欧文要旨・欧文タイトルは、別紙として下さい。

【別紙】 欧文タイトル・ローマ字表記による著者姓名・欧文要旨
和文タイトル *――副題――*
欧文タイトル *――副題――*
著者姓名
ローマ字表記による著者姓名
論文本体
注
引用文献
参照楽譜
参照音源

II. 書誌情報と補足説明

本文中で文献を引用または参照する場合は、言及した直後に、著者姓、発行年、参照ページ等の書誌情報を丸括弧でくくり、本文に挿入して下さい（例 1）。なお、丸括弧自体は、言及文献の和洋を問わず、全角文字で入力することとします。

例 1 (Dahlhaus 1983: 277)
(末吉 2000: 24)

ただし、文中に著者姓があらわれる場合には、丸括弧内で再録する（例 2a）必要はありません。例 2b のようにして下さい。

例 2a 柴田（柴田 1978: 29-30）、小塩（小塩 1992: 86-87）に見られるように、
例 2b 柴田（1978: 29-30）、小塩（1992: 86-87）に見られるように、

もしある本が数巻から成る場合、巻号の後にコロンを挿入し、ページ番号を示します（例 3）。ただし、ある巻号そのものを指す場合には、ページ数を示す場合との混同をさけるために「vol.」あるいは「巻」等の表現を挿入してください（例 4）。また、参照ページが複数巻にわたる場合には、巻と巻をセミコロンで分けてください（例 5）。

例 3 (Kusnierek 1992, 3: 125)
(勝田 1982, 2: 963)
例 4 (Pasler 1995, vol. 2)
(後藤 1991, 第 4 巻)
例 5 (Pasler 1995, 2: 26, 35; 3: 50-53)
(角倉 1997, 1: 141; 4: 330, 450)

その他、頻繁に引用する文献を略号で示すなどの工夫は、慣例にしたがって適宜行ってください。その際、「引用文献」の冒頭に「文献略号一覧」を明記して下さい。

III. 注の方式

1. 注の付け方

注で書誌情報を詳しく記述する方式は、注の数を増やし、結果として論文自体のページ数を増やしてしまうため避けて下さい。参照した文献の詳しい書誌情報は、論文の最後に「引用文献」としてまとめて頂くことになります。また、注のなかで書誌情報に言及する必要がある場合は、本文と同様に丸括弧方式で言及してください。

2. 注記番号の表示

その番号のみを当該箇所の右肩上に書き込むこととします。

例1 The means by which the traditional Western composers have attempted to communicate with their audience have been discussed at length by Eduard Hanslick,² Heinrich Schenker,³ Suzanne Langer,⁴ and Leonard Meyer,⁵ to name but a few.

例2 「音場は、温度などの環境変化によって常に変動し、また騒音信号も常に定常的とは限らない。」¹⁶

3. 脚注方式について

投稿時、注は、脚注方式をとらず論文末にまとめることとします。本誌掲載のための印刷組みの時点で、音楽之友社編集部において脚注方式に変換いたします。データを確実に変換するために是非とも必要な手順ですので、悪しからずご了承下さい。

IV. 引用文献の書式

論文末に一覧表としてつけ、和文は著者姓の五十音順、欧文は著者姓のアルファベット順に配列することとします。

以下に示す書式の目安を参考にしてください。基本例中で、下線 [_あるいは_] はスペースを表します。

1. 和文献

単行書

〈基本例〉 著（編）者名__刊行年__『書名』__刊行地: 刊行所。（叢書情報等）〔収録情報等〕

例1 林謙三 1964 『正倉院楽器の研究』 東京: 風間書店。

例2 秀松軒編 元禄 16 (1703) 『松の葉』 京都: 井筒屋庄兵衛・万木治兵衛。

〔復刻版 浅野健二校注 1959 『中世近世歌謡集』 341-530 東京: 岩波書店。(日本古典文学大系 44)〕

雑誌等

近年の定期刊行物増加の傾向にともない、発行者名を付すこととします。

〈基本例〉 著者名_刊行年_「論文名」_発行者名『雑誌名/紀要名』巻号:_ページ。

例3 林光 1991 「創造と日常のあいだ —バッハ・モーツァルト・宮澤賢治—」
音楽教育の会『音楽教育』 325: 7-20。

ただし、本誌『音楽学』や発行者名が明白な場合については、発行者名（日本音楽学会など）を省いて結構です。

例4 相沢陸奥男 1954 「音楽学の成立並に各分野の関連に就て」 『音楽学』 第1巻第1号: 7-20。

例5 角倉一朗 2000 「20世紀のバッハ研究」 『東京藝術大学音楽学部紀要』 第26集: 47-65。

2. 欧文献

単行書

〈基本例〉 著者姓_名_刊行年_書名_刊行地_刊行所。〔翻訳書情報等〕

例6 Grout, Donald J. 1960. *A history of Western music*. New York: Norton. [服部幸三・戸口幸策訳 1969 『西洋音楽史』 東京: 音楽之友社]

雑誌等

〈基本例〉 著者姓_名_刊行年_「論文名」_雑誌・紀要名_巻号:_論文全体のページ。

例7 Blume, Friedrich. 1968. "J. S. Bach's youth," *Musical quarterly*. 54, no. 1: 1-20.

3. レコード

下記の例を参考にして、レコード名、曲名、演奏者名、レーベル名、レコード番号等を表示してください。

例8 『雅楽大系 器楽編』 田辺尚雄・芝祐泰監修解説, VICTOR, SJ3002-1~3.

例9 Brahms, Johannes. *Piano Concerto No. 2 in B flat major, Op. 83*. Vladimir Ashkenazy. Zubin Mehta. The London Symphony Orchestra. Decca, CS 6539.

あるいは、

例10 *Johannes Brahms, Piano Concerto No. 2 in B flat major, Op. 83*. Vladimir

4. 楽譜

下記の例を参考にして、作曲者名、曲名、編者・校訂者名、刊行年、曲（集）名等を表示してください。

例11 山田松黒編 安永 8 (1779) 『箏曲大意抄』全 6 冊 名古屋: 尾張書肆。

例12 Verdi, Giuseppe. *Rigoletto: melodrama in three acts by Francesco Maria Piave*. Edited by Martin Chusid. *The works of Giuseppe Verdi*. ser. 1, operas. Chicago and London: University of Chicago Press, Milan: G. Ricordi, 1982.

V. その他

1. イタリック体

タイプ原稿では下線で代用することとします。

2. 用字用語

原則として当用漢字と現代仮名遣いを用いてください。専門用語の場合には例外も認められますが、印刷不可能なこともありますので、予め御了承ください。外国語のカタカナ書きは、論文中で統一されている限り、特殊な表記も差し支えありません。数字は、原則としてアラビア数字を用いますが、慣用語、固有名詞、度量的意味の薄いものには漢数字を用いてください。

3. 参照および引用する文献のタイトル表記（ローマ字）

英語

タイトルの最初の文字、および固有名詞の頭文字は大文字とし、その他は全て小文字とします。

仏語

タイトルの最初の文字、および固有名詞の頭文字は大文字とし、その他は全て小文字とします。

独語

タイトルの最初の文字、および全ての名詞の頭文字は大文字にします。

その他

ローマ字に転写されたアラビア語、ロシア語などでは当該言語の習慣に従ってください。

VI. 各種記号の使用法

名称	記号	用法	例	備考
中グロ	◻	名詞の並列	東洋・西洋	ピリオドとの位置の違いに注意
ピリオド	□	1. 欧米単語の省略	ed.	
		2. 名前の省略	J.S.バッハ	
傍点	••• あああ	特に力点を置く字句		
引用符	" "	欧米引用文		
ブラケット	[]	引用文への補足・修正		
丸カッコまたはパーレン	()	補足的な説明		
ヒッカケまたはカギ	「 」	1. 和文引用文 2. 雑誌論文等の和題目 3. 強調		
二重ヒッカケまたはフタエカギ	『 』	1. 「 」内での引用文 2. 書名, 雑誌名	『音楽学』第1巻第1号	
二重ギメまたは二重山パーレン	《 》	作品名	《カンタータ第82番：我は満ち足れり Ich habe genug》 (BWV82)	
ハイフン	-	欧文の単語の分かち書き		
二重ダッシュ	=	外国語の固有名詞の分節	ジャン=ジャック	欧綴ではハイフン(ex) Jean-Jacques
波線	～	数字で範囲を示す	1770～1827	
ナカセンまたは二倍のダッシュ	——	挿入句		2マス分使用
リーダー	中略		2マス分使用 (1マスに3点)
ルビ		ふりがな (漢字の上に)	おんがくがく へんしゅう 『音楽学』編集	
下線	——	欧文イタリック体の代用, 外来語の明示, 書名・雑誌名	<u>Studia Musicologica</u>	